

学校舞踊の創作に関する諸問題 Ⅱ

碓 井 エ イ

Ei USUI : Problems in the Creation of the School Dance

はじめに

まったく個性的な自己の身体を素材にして行なう表現活動・創作活動は個性的であるがために問題点が少なくない。例えば与えられた諸種の条件によってそれぞれ身体表現を行ない、次第にひとつのフレーズに纏めあげ、場合によっては良い空間性を駆使し、さらに時間的内容にも充実した創作作品を一応満足感を得るまで到達させる活動は矢張り困難を伴なうのが現在の実状とってよかろう。

昨年度までの研究によって次の事柄が或程度明確にできたと考えている。すなわち小・中・高校において、グループ学習による創作舞踊を経験した教育学部舞踊Ⅰの受講生達は、(経験の無い特別課程保健体育科男子専攻生も含めて)自由選題による個人表現、創作作品を創るところの一般的身体表現能力をもっていると考察している。しかし自由に動きを生みだし連続させ発展できる各個人も、グループ活動による創作の場合は予想以上に多くの制約を受ける結果、いわば変化の要素の少ない単純な表現構造による作品に終止する現象をよくみる。そこで各個人のもつ身体的表現・創作能力をできる限りに容易に各集団作品に転移する手段を考えていきたい。

今回はもっとも単純な動き創りから始めて、ひとつのフレーズに動きを反復延長、展開する場合の問題点を探り、さらに一般的に考えられている「動きを生みだすひとつの動機づけとなっている音楽」(今回はピアノ伴奏)を与えて、これらに関する問題点を考察してみる。

I 研究の方法

期日は昭和46年5月中旬より7月上旬まで。① 模倣・表現・創作活動の実施状況を調査する。② 5月21・22・28・29日、6月2日に実施された附中、松江北高校の教生授業実習を観察記録して動き創りの問題点比較に備える。③ 6月13日伴奏選曲のため舞踊創作経験者7名に対して $\frac{1}{4}$ 拍子9曲、 $\frac{1}{4}$ 拍子7曲、 $\frac{1}{4}$ 拍子7曲、 $\frac{3}{8}$ 拍子1曲の適当と考えるフレーズを与えて動きの生みだし即興練習の過程を観察する。その結果 $\frac{1}{4}$ 拍子2曲、 $\frac{1}{4}$ 拍子2曲、 $\frac{1}{4}$ 拍子2曲の各フレーズに決定する。④ 舞踊研究班2名(Cグループ)に予備実験を行ない実施の参考にする。⑤ 7月8・9日小学課程12名(Aグループ)、特体男子6名(Bグループ)をランダ

ても矢張り困難である——4 B A 2 C 1 ㉔ ① 容易に纏められた——A 3 B 0 C 3, 普通程度——A 1 B 1 C 8, 困難である——A 8 B 5 C 1, ㉕ 困難な原因を考えてみる——A群=一連の動きが何を表わしているか考えて動く必要がある。動きを連続する関連が問題になる。良い纏まりを創るのが難しい。次の動きを瞬間的に考える事態。始めは動きが緩徐だったので継続に困る。B群=4呼間の反復をやろうとしてもうまくできない。纏めが困難である・延長の方法が判らなかつた・同じ動きの反復だから難しい。C群=前の動きを少し忘れていた・4呼間全部変った因子の運動を創ったので発展させ難かつた。テンポが判らない。A群では表現性・連続の実際・良い纏まり・動き創りの瞬間性・動きの生みだしと速度感の適切な関連のあり方等が問題となり, B群では短かい4呼間の反復の方法・統一性など動きのフレーズの創り方における根本問題があげられているが, 創作経験が無い・少ない場合にみられる初歩的な問題点が指摘されているとみてよい。また反復時に生ずる技術上の問題もでているが, これは基本練習における重心の移動要領として練習を重ねている技術内容に含まれている。与えられる動きと自由に生みだす動きの要因の異質に関わる問題でもある。C群では動き創りの安易なとり組み方・基底になる4呼間の動き創りの方法に既に幾種類かのリズムパターンの結合がある實際を示めし, そのなかで高次なあり方の展開方法に問題があるとみられる。しかし四種類の運動因子結合の場合は, 実に多数の展開方法が存在するので, もっとも一般的とみられる容易な展開方法を導きだす必要もあると同時に漸次程度を高める方法も模索する必要が生じてくる。㉖ 特別考慮した点——A群=次の動きを考えて4呼の動きを創る・イメージをもって創る・リズム・始まりの感じをだす・同じような動きのパターンを創る。B群=左右同じ動きを反復する為に4呼では左方の動きを創った・16呼に延長できること・簡単な動きにした・4呼それぞれの変化を考えて連続させた。C群=発展できるひとつのモチーフだけで4呼間の動きを創った・簡単な動作にした・変化を考えた。㉗㉘㉙の表現段階を体験させた結果は, 発展方法を意識する・動きへ転移する方法に具体性がでる等がみられ, また反復性への考慮がA群に現われ, B群では異時的シンメトリーの出現・延長の意識化・運動要因決定へのとり組み方が真摯になる等があげられ, C群では直接的発展法の理解ができる等があげられている。またB群C群にそれぞれ発展の容易を意図する目的から, リズムパターンを簡潔にしたり全く反対に複雑にする考え方がみられ, 舞踊の個性的な動き創りの選択決定方法に錯綜する多様性を認めることができる。㉚ 良く纏まった——A 2 B 3 C 7, 普通程度である——A 1 B 3 C 3, 多少困難である——A 9 B 0 C 2 ㉛ ① 行進曲風の動きになった——A 4 B 2 C 3, ㉜ 最初のピアノ伴奏であるが特別とらわれなかつた——A 8 B 4 C 9, 然しC群にはリズムカルな跳躍運動が現われ幾らか影響を受けている實際が認められている。① シンコーションの効果によって動きの生みだし易い旋律を選択し, 動きのアクセントによる効果を知ろうとした。① 曲のリズムのとらえ方が難しい——A 4 B 3 C 2, 特別に感じない——A 4 B 1 C 2, 動き易いA 2 B 1 C 8, 標本中で特に音楽に関する理解の深いものは伴奏音の効果を次のよう

にあげている。① 曲の感じからイメージが湧いて動き易い。② 調子にのり複雑に創り過ぎて思い出し難い。① 唱いながら動くように指示を与えたが、実際には動き創りに直剣すぎて声がでない状態であった。知っている曲なので動き易い——A 0 B 0 C 4, 幾らか動き易い——A 8 B 3 C 1, 特別に感じない——A 4 B 3 C 7, 経験の多い標本はリズムを予測できて動きの生みだし、発展が容易であるとしている。⑫ ① 社交ダンスのワルツを連想する——A 3 B 2 C 4, 特別に関係はしない——A 9 B 4 C 8, ② ワルツのリズムにのれた——A 1 B 0 C 9, 普通——A 2 B 2 C 12, ——難かしいA 9 B 4 C 3, Waltz 1 の聴き馴れている曲ではあるが、シンコーションのあり方が問題で一般的には動きのリズムを生みだし難い結果となっている。① タンバリンの  リズムに合わせて動きを生み出す方法である。リズムのとらえ方が難かしい——A 4 B 3 C 2, 普通——A 5 B 3 C 3, 動き易い——A 3 B 0 C 7, タンバリンで変化のあるアクセントを効果的に組み合わせて伴奏音とする場合は、新しいリズムを生み出すヒントとなる事例は多いが、この調査のように初めての試りみの結果は次のような反省もでている。リズムが判明して動き易いがかえって難かしい面もある。音だけの場合が動き易い。音楽は感じをとらえなければならぬので比較的難かしいが音の方が動き易い。⑩ リズムのとらえ方が難かしい——A 4 B 4 C 2, 普通——A 5 B 2 C 5, 動き易い——A 3 B 0 C 5, ⑩動き易い——A 3 B 0 C 5, 普通——A 3 B 3 C 4, 難かしい——A 6 B 3 C 1, ⑪ この項目では標本全員がそれぞれ違った擬態語を考えて動きに移している。こちこち、ぴゅうぴゅう、かちかち、さらさら、すーいすーい、ごろごろ、はーらはーら、ぶーん、しゅんしゅん、くるくる、がたがた、きらきら etc のように反復のなかに既に動きのリズムの組み合わせも生じておもしろい。動きの容易性の考察は、可愛い動きだから(動きの範囲が縮小されていること)、自分のもつ感じを自由にだせる等があげられて擬態語そのものが直接的リズムであるという考察には至っていない。また男子では「判らない」と判然述べるものもある。⑫ ① 動き易い要因についての所見——A 題材を知っている・ゆっくりしている・繰り返えしであるなど。B 波を打つだけだから、動きにウェーブをだせばよい。強い波の表現は動き易い・上下運動を強調すればよい。C リズムがとり易い。② 困難な要因に関する所見——A どういう状態の波を創るのか。つながり・動きを大きくしなければならない。B リズムが一定でないこと・ありふれる点・C 波動(舞踊で重視する運動要因のひとつで全身的波動・部分的波動等がある。)の変化がなかなか求め難い・繰り返えし, ④ ① 容易な要因に関する所見——A イメージが判明でている・題材がよく理解されている・反復性など。B——手を振るだけだから・風に吹かれる感じをだせばよい。C 強風の感じはだし易い。② 困難な点に関する所見——A つながり・速度の関係。C リズムがとり難い。④ ① 容易な点に関する所見——A 自由に作れる・イメージがとらえ易い。B 考えが自由な動きになる・自由にやればよい。C イメージが湧き易い・表現し易い。② 困難な点に関する所見——A 具体的でない・抽象的である。B 抽象的だから、表現の問題だから。C 強さを出

し難い。

① ② ③ は伴奏音を与えずに各自のもつ模倣表現能力の十分な発揚を期待する項目であるが、A群B群にとっては未だ経験の少ない即興的表現に類する内容が多い。この三項目の動き創りは容易であるとして挙げられる条件は、困難な点の所見より多く、前者は動きのリズムが生み出し易い(41%)を筆頭に、イメージが持てる・自由自在にとり扱えられる・理解できる題材・反復性・表現・速度などが容易な表現方法に結び付き、後者では動きのリズム生みだしが困難である24%を筆頭に表現・抽象性・連続・強調・速度・一般性の問題などがあげられ表現技術構造のもつ問題の核心に触れる所見があげられている。そして容易であるとする前者にA群B群が多く含まれ、後者にはA群C群が含まれているが、同じ小題を表現する場合でも、性差により経験の差、技能差によって、表現を意識する過程の微妙な揺れ動きがみられている。その結果は具体的な運動へのとり組み方に、予想を遙かに上廻る程の多様性をみることが出来る。例えば波を打つ動きだけだから容易であるとする未経験者と、波動の変化がなかなか求め難いとする経験者との差異がみられている。またこの波動の変化を求める段階では実に多くのリズムパターンが考えられるが、その選択決定が舞踊の重要な技能のひとつとなり、さらにその決定には第三者的視点の上になつて幅広い表現法の理解認識が重要になると考えている。

① ② の項目として設定した「波」「風」はS43年の舞踊I受講生の個人創作作品にとりあげられた題材中もっとも選択率の高い部類に属し、63作品中「波」を主題にした作品は41%で「風」を主題にした作品は8%となっている。次に波の題材例をあげてみる。しぶき、海、浜辺、海の日、水の流れ、川の流れ、波紋、夕方の海、夏の海の日、日本海の波、流れの一生などで小品から大作までの層を含む実情がみられ、また作品として観賞者に表現する心を伝える効果を考慮に入れ、さらに作品の風格が滲みでるような題材への選択法も伺える内容がみられている。

〔2〕 フレーズ構成過程にみられる問題点

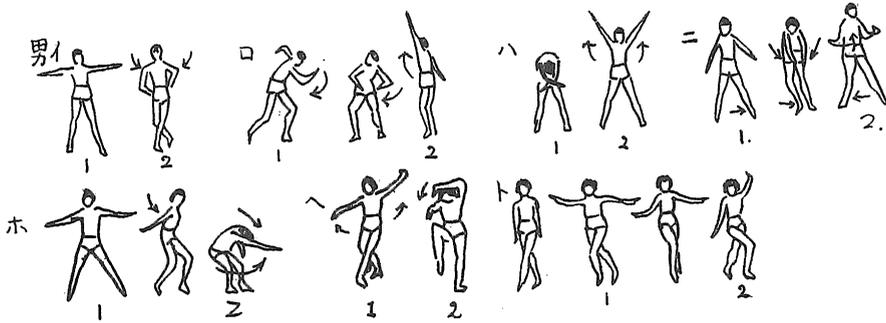
① 1呼間(人間が一步歩く時間的長さであるが、与えられる条件・動きを生み出す条件によって長さに相当の巾がみがみられるのが普通である。)でポーズを創ったり美しい彫刻像になる。



男子女子それぞれが即興的に形成するポーズには良く特徴が現われ、男子は直線的であるのに対して女子は上肢下肢の形成する角度が豊富であるのに加えて、男子に比較して左右相称的でないという動き創りの効果がみられる。特に女子八にみられる角度は顔の面・右の手首にも特徴的な角度がみられ、身体のもつ差のあり方を鋭く感知した豊かな表現法を内包しているとみられる。最近舞踊II受講生達に「もっとも得意なポーズ」の課題を与えて一呼の動き創りを試みた場合も、多角的な四肢の有効なつかいかたがみられたが、単なる瞬間的な動きの創り方

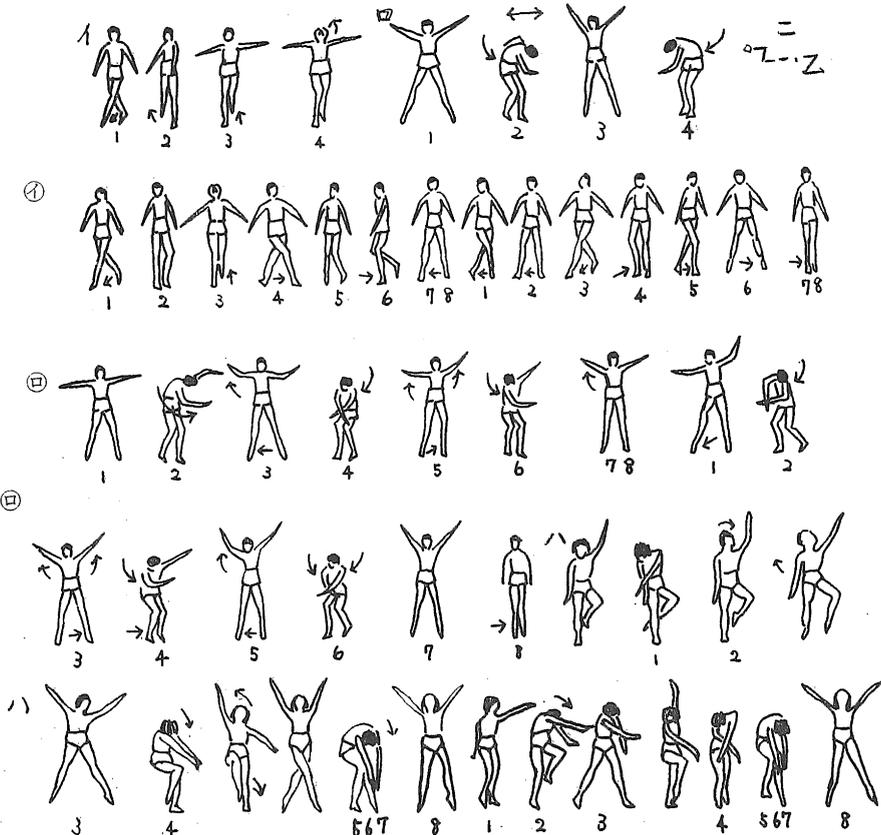
にも最も有効であるという見透しに立った指示が必要になってくる。引き続き各自表現した個々の動きに適した助言を与えて、その成果を確かめ自信をもたせる指導の方向は益々動きの獨創性を高め美的要因に接近できると考えている。

二 図



イ 動きのリズムに対して正攻法的な対処のしかたで直線的力強さはリズムの変化の要因を幾らか減少している。ロ 男子には珍らしい柔軟性をもち動きのリズムも豊かである。ハ 動きの順序の1・2が反対に現われる場合は平凡なリズムになるが、リズムの導入が面白く、動け

三 図

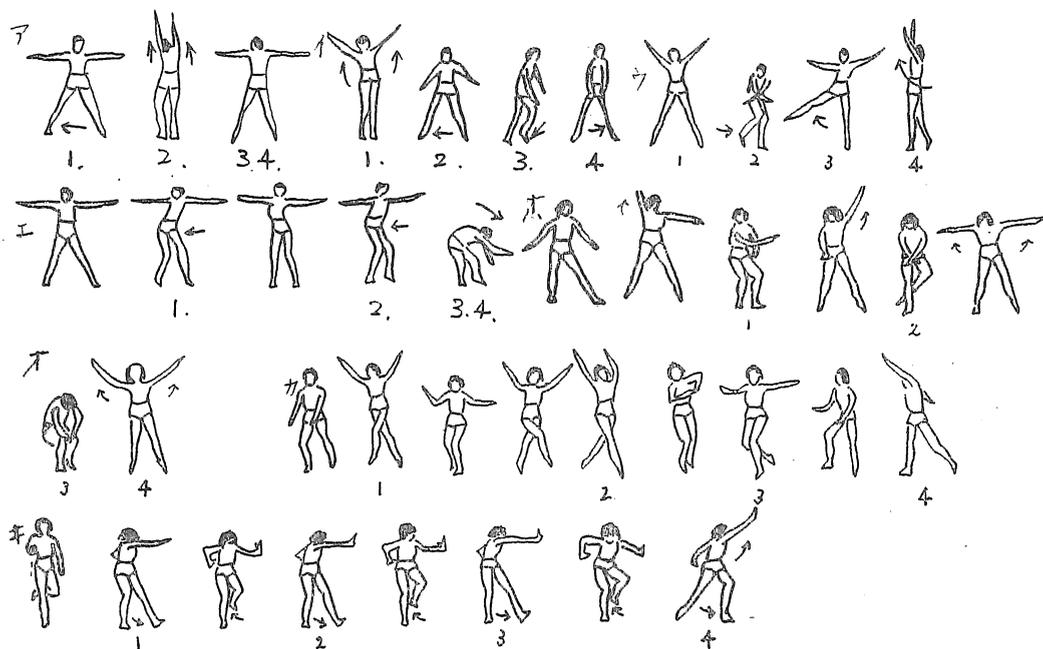


る身体は各条件によるリズムの変化を相当積極的にしている。ホヘの女子標本はそれぞれ2へ変るリズム過程の急激な運びが面白く、全身的なリズム変化の妙味をみせている。トは動きのリズム決定に戸迷いをみせながらついに動いてしまった不安定な状態である。二図のイは男子の代表的な動きのリズムで④の発展は上肢下肢共にリズムは良好で、特に右足開脚のリズムが優れて動き全般のリズムを誘導している。これは自由に動ける速度が与えられた結果もっとも得意な動きの要因が生みだされて連続できたと考察できる。また特に後半のリズムに正確さがみられるが、二のように呼数を追う下肢のリズムの変化は確かであるが、懸命すぎて上肢のリズムが下肢の動きに伴わず不十分なりズムとなる。然し多少の練習時間によって正確になるであろう期待は、5以下の動き創りにも伺えるものがある。(二は移動の方法である。これは直接エジターで動きの要因の追跡する順序であるが、図はこの反対の移動方向をとる。)ロは⑤のように結極六回反復される動きであるが連続の方法、一応の終止などは自然に理解していて豊かな表現力をもっていると推測される。ホは身体の部分をダブらせる細かいリズムが現われているが、この標本得意のリズムで各実験の前半に数多く出現している。すなわち床上における屈伸リズム・片腕の曲線的変化・上肢の体側上にみられる伸屈変化などと、一般的な平坦なりズムの所有者には簡単に模倣も容易にできない程変化のあるリズムの組織構成をみせている。そして今回の実験中もっとも変化の要素の強い豊かな動きのリズムをもち、各テストに必らず新しいリズム要因を創作している。特に胴体の柔軟度は前屈・側屈・後屈のそれぞれに十分に現われ、これに伴って十二分に動ける上体上肢によって下肢のリズムが従属すると考察している。一般的に現われる動きのリズムにはこの反対の表現法がみられ、日常生活で最もよく活動する下肢の動きが先づリズムを決定し、上体上肢のリズムがそれに追随して全身的なりズムとなっている。二の移動は斜行前進が交互に反復されているがハとは対照的であって終止移動の方法は変わらず常に同傾向の運動要因連続も表現している。然しこれが一般的現象であって、過去に特別運動クラブに所属する経験もなく、創作経験もこれまでの就学過程で有ったり無かったり等の場合には、もっとも多くみられる動きのフレーズ連続法とみてよからう。すなわち新しいリズム展開に移行する際の不安定な表現は次の項目では、おおよそ確実なりズムパターンとなり、この反復によって本人の動きのリズムは次第に確実になり次の新しいリズム発見へと発展連続が期待できるのである。次に不安定なりズムの影響について述べてみる。例えばホッピングステップの連続のなかで、一回目のリズムが正確に表現されても、つなぎの歩が一步多くなったという原因から次の反復ステップが乱れたり、また跳躍の連続過程で跳躍の方向変換のタイミングが崩れると同じ跳躍が不安定なりズムとなり、さらに三回四回目の跳躍に何らかの影響を与える結果になるなどが考察できるのである。四図カは一応軽い跳躍の出現構成が技術の特徴となり、特別に動きの激しさはみられないが、過去に習得した古典バレエの基礎技術が通じて優しい動きの流れに新鮮味が見出されている。これでは見極められないが前後の連続がスムーズで美の要因であるところのよい連続の典型とみている。この舞踊的素養

といえる技能は、性格的にそれほど積極性があるとはみられない標本独特の物静かな動きのリズムに、16呼間で2呼～4呼に新しいリズムを連結させているのが優れた技能となっている。

四呼間の動き創りであっても単純な作業に対するような思考認識では、決して良い動きは表出できない。これまでの日常生活に反復出現する動作や、外界への行動に対処する生の動きに関する体験の積み重ねのなかから、もっとも身についた自信のある運動要因が単独にまた複合された動きが模倣・表現となって現われる。そして動きの生みだしは直接に想像に結び付き、良い悪いの判断を入れずに、むしろ反射的に動きを生みだし、動きのリズムを感じながら反復・類似・連絡などの方法を重ね、さらにその動きに対する満足感が新しいインスピレーションをおこし、自己の可能性を自由に表現する活動となるのである。そして別種の動機が与えられて動き作りの所要時間が延長されるに従って、驚く程変容された動きのリズムに完全に变化する練習状態が見受けられている。学校における創作舞踊の学習指導法の改変を急務としていた頃は、即興的表現練習に戦前に指導された管のマヅルカステップなどが現われて苦笑させられた記憶も少くなかった。運動会の花である行進遊戯などで、たゞき込まれた技能が教え子達によって受け継がれ即興に具えて現われたとみている。とに角全身を広い空間に呈して、よく動きよく表現するために、身体の運動感覚の充実を期待する心の中核の機能は、内部に眠っているリズムカルな動きへの意欲をゆり動かし表現へと駆りたてられる。何人もバラエティに富んだ動きのリズムを実に楽しく動けるものだと考えてよいのではなかろうか。

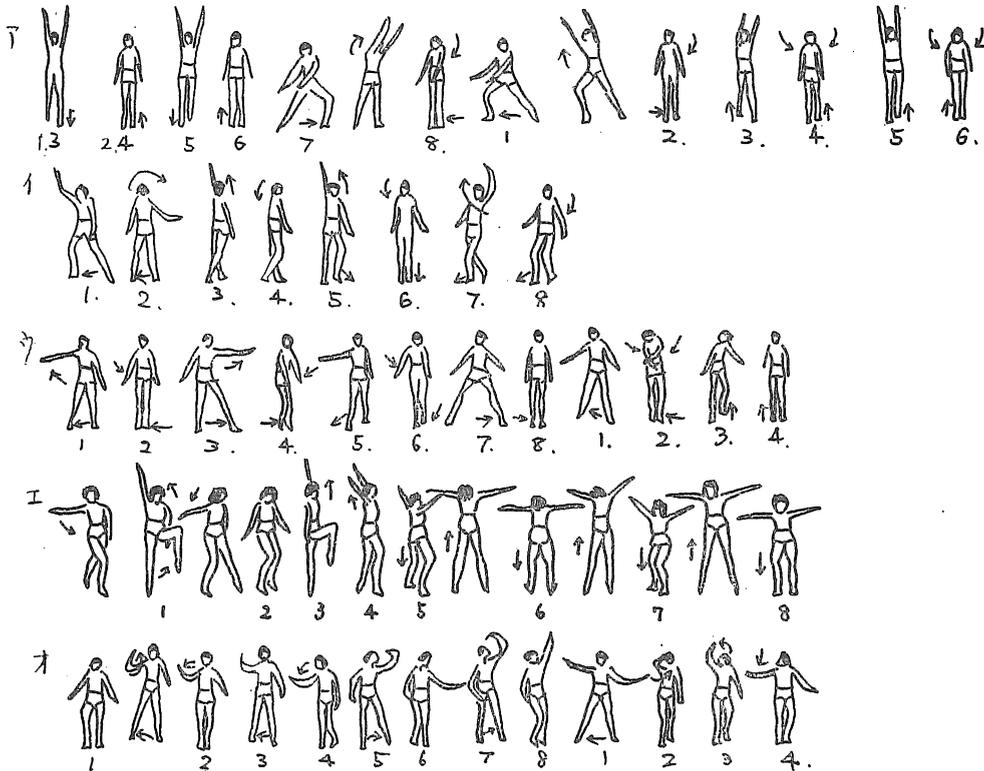
四 図



ア 移動方法は変わり水平的な動きが立体的な動きと変化し、リズムにも変化がでている。

イ アと同様の変化がそれぞれ現われている。ウ 前半の動きは前と同様のリズムをとらえているが後半は完全に運動要因の変化を連続させ、次の連続も変化のあるリズムを選択して最後は完全に対照的な方向をとって困難なリズムの反復を実施している。またその連続には少しの無理もなく男子のもつ巧緻性を遺憾なく発揮している。この標本は動きの要因を多く内在しているタイプに属し、いわゆる十分動ける身体をもっているのであって、女子にもよく現われる動き創りである。比較的緩徐なタクトに従って各呼の動きに連続性を考えながら独立したポーズを取り、また動きを纏めてしまう。この際 I であると次の動きへの移行が容易であるが、さらに立体的変化を求めて片立膝で終止型へと運ぶのもよく見受けられる。オの4呼のようにそれぞれ独立した動きのリズムを考える場合は、フレーズへの発展内容が多種多様であって事例も多く出現しているので、この傾向追求も必要であると考えている。オ その場での左足を主体に創るその場のリズムは完全に異なった運動要因となっている。カ 移動の方法は前の四呼の応用変化とみらるが、動きのリズムは相当洗練されて現われている。キ 移動方法、全身のリズムは完全に変容している。この調査段階でのそれぞれの動き創りの特徴をあげると、創作経験の多い場合は、その場活用の動き創りができているが、経験の少ない標本は最初に移動する方法に重点がおかれている。

五 図



行進練習、手具運動として実施した輪の動き創りには伴奏曲を活用しているが、曲のリズムで動きを創る際の抵抗感を減少するために行進曲から始める。ア は直線的な動きが強調されてリズムが明確にてでいる。イ 自転そのものは男子のステップの強大から移動を伴なって現われ、またツーステップも規則的にみられ、一步一步の前進にそれぞれアクセントが伴なってリズム感の良さを伺わせる動きの内容となっている。ウ 前に現われたスライド気味のステップは確実なリズムに発展しているが、まだ上肢の動きは伴わず、移動の斜行前進はスムーズに連続している。エ 行進曲風の単純なリズムに規制されて各項目のなかでは最も単純なリズムとなりホップステップの自転を連結する。しかし自転のリズムは曲のリズムに従属しない独自の運動の面白味を表現して即興性の内容を豊かにしている。オ 曲のメロディーのリズムは下肢移動の動きで現われ、伴奏音のタクトを上肢の片腕体側での曲線的移行で表現しているが、動くときは総合的動きの要因としてとらえているので美事な律動となっている。この複雑なリズムは舞踊譜でもなかなか表出できず、その上今回の総べての図は鉛筆書きの下絵にみられた細かいリズムの線は表現されていないので残念におもっている。

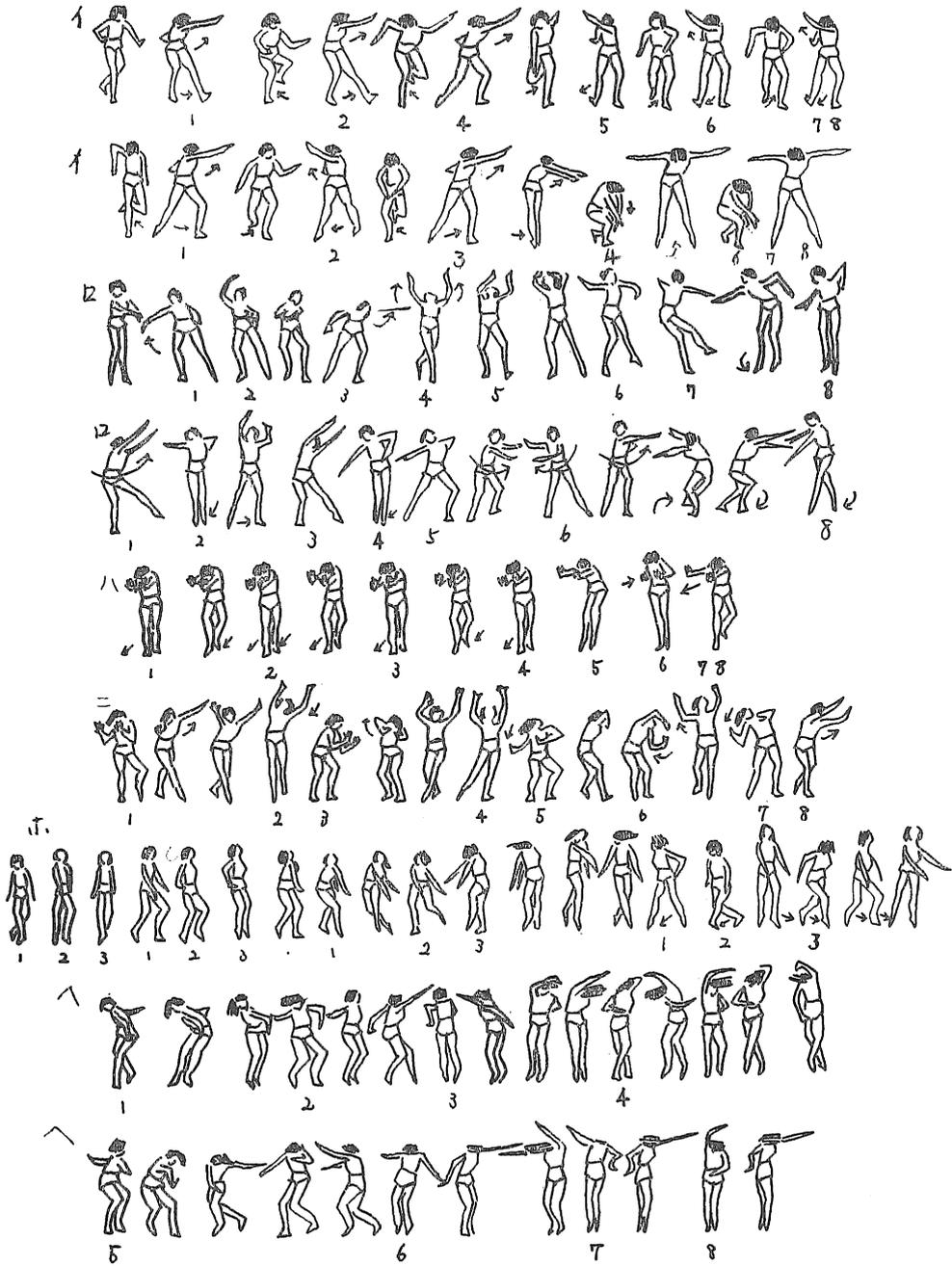
⑥ **女子にみられる動きのリズムの特徴**、女子の動きのリズム要因に移動を伴う回転・自転・自転を伴う移動などが数多く現われるのが特徴的事実となっている。(これは昨年度報告している。)

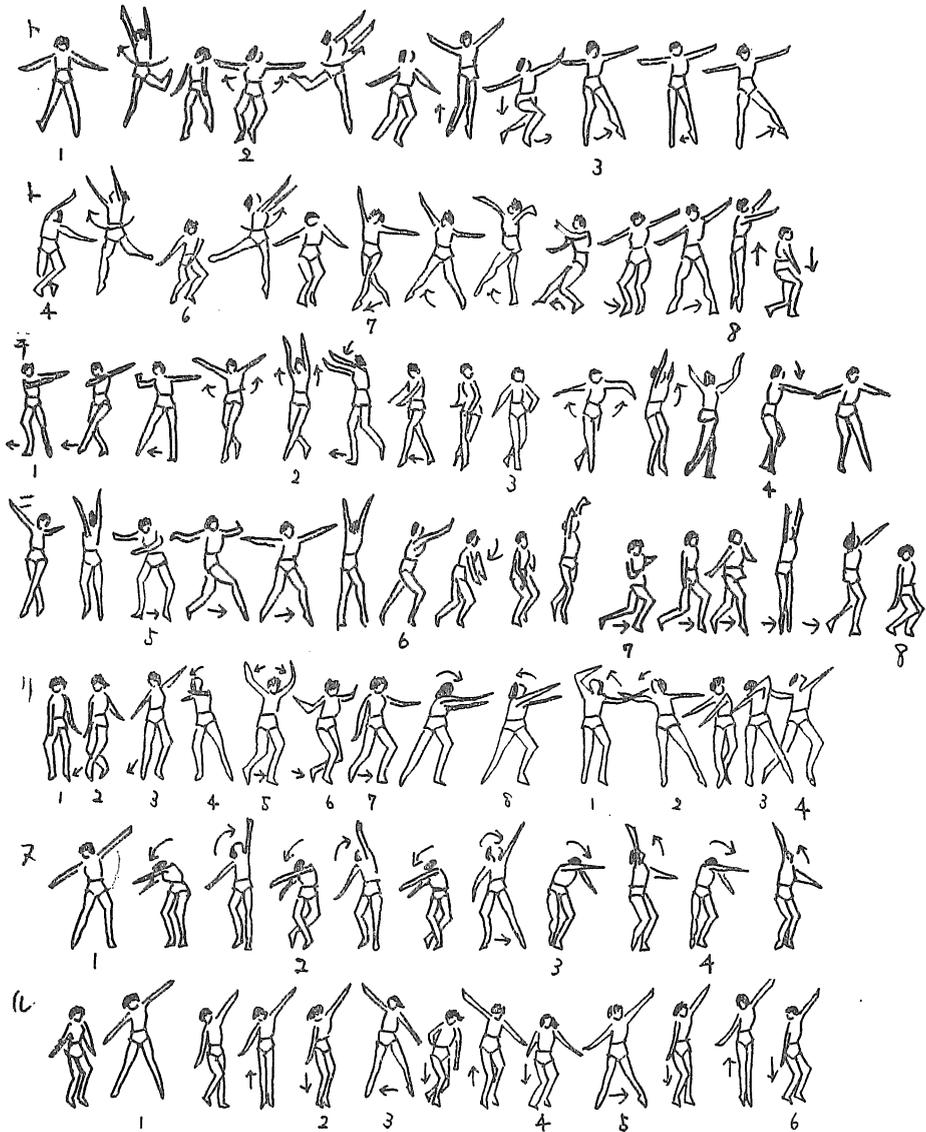
第六表の標本は創作経験も多く、跳躍技術以外は標本中最高のリズミカルさをもっている。

イ の項目はその場活用の運動例として第四表キに載せ、オの展開例は三表ハに載せている。四表オのフレーズ構成は五表エに載せている。第三表ハの後半は柔軟で弾力に満ちたリズムを駆使した標本特有の構成で、細かいリズムと対照的なリズム結合により展開をみせている。イは四呼延長で反復変化が面白い。ロ **三拍子のバランスの弾力**を利用して体側での屈伸を伴う重心移動は、さらに弾力的な前進歩を生み、全身的な流動の動きを連続させ、また自転、大股継走前進と緩徐な歩で進んでいる。これは曲のもつシンコペーションの動きへの転移で弾力性のある運動へ融合し易い性質であるためと考察している。ハ 前に示めされたロと関連のある Lento の曲の感じは、引き続きその場における重心移動となり身体の側面を強調した弾力性に片腕ハの字交互回旋が完全に調和している。さらに自転の反復に上肢のリズムが繰り返えされながら下肢の変化に従属している。これは女性のもつ流動美を遺憾なく表現していて、運動のリズムとしては殆んど無駄がないとみている。ニ 三拍子の曲の感じで弾力的なアクセントを強調して緩やかな速度の前進を実施している。このアクセントは軽いジャンプの要領で下肢を回旋させ、また回旋のリズムは自転移動のとき現われる上体の回旋を連続させる誘因となっていて、この上体回旋が全身的によく纏まったリズムの印象を強く与えている。

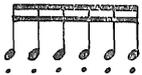
リ **上肢並行を伴う正面向き重心移動**・自転などであるが上肢回旋は肩関節の柔軟が特に優れているので上肢の線が素直に伸びて直線的曲線的結合運動が十分表現されている。ト ○にアクセントをつけた緩やかな弾力的なスライド前進であるが、このジャンプ調のアクセ

六 図





トで片脚を廻らす自転には上体の屈度変化を伴う回旋運動が結合して、全身的に融合されたリズムとなって立体感を豊かにしている。チ 前後左右への解緊運動と自転にジグザグ前進を結合し、さらに高低の変化による片腕・下方より体前への線は強調の美となって新しいリズムを生みだしている。ヘ 上体を体の右斜下・上方・左斜上方・斜左下・下方と各方向への変化はおもしろいリズムを生み、自転連続三回に結合しているが、その場のバランスを加味した重心移動と共に体側屈毎に伸びる両肢の斜上・斜下の線移行が、さらに首の角度に結合して流れている。



結合の繊細なリズムを身体の全体と各部分を組み合わせる動きのリズムを生みだしている。ホ 爪先立歩前進移動に上体の軽い後屈と完全前屈がよく結合され、二回の自転が

加わっている。ヌ 連続振動と前屈の結合が反復される。ル 自転の伴なう前進移動であるが、上肢の斜上方と斜下方に流れる線と自転が、よいコントラストとなって自由に創り楽しむリズム結合の運動美が出現している。この標本は舞踊的素質に恵まれた身体をもち、そのリズムミカルな動きはどのような速度・リズム・曲想の変化に対しても、即興的に鋭く結びつくリズム能力をもっている。この調査に関しては毎回新鮮なリズムを生みだし、これを全身的リズムとして消化し表現を高める点が優れている。しかも即興的な新しいリズムの結合・反復・連続・発展変化に現われるリズムの不安定な乱れは全くみられず・自由に動きを取捨選択して曲のリズムに合致させ、さらにメロデーの展開を予想して動きを自由に連続発展させる過程には、ダンスをこの上なく楽しみ愛する安定した心情をみるおもいである。

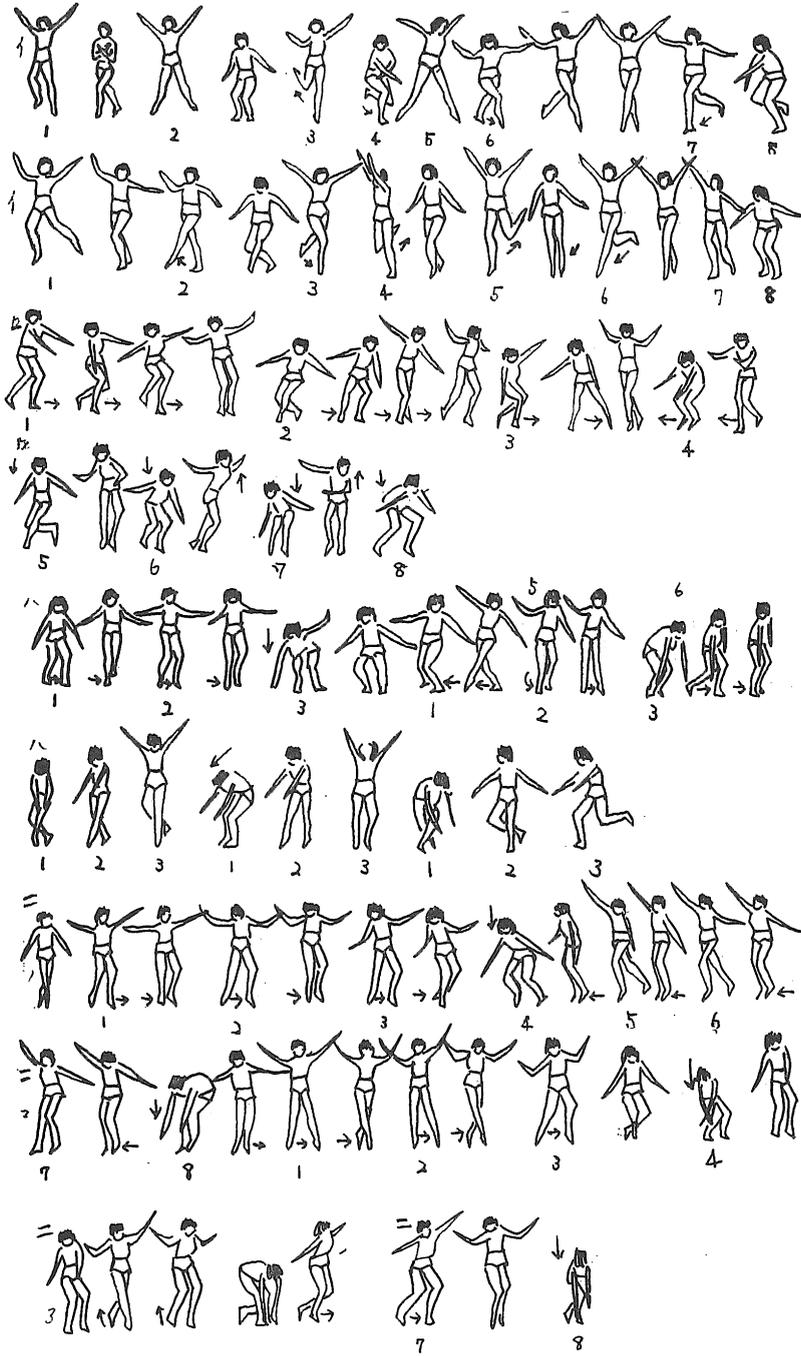
動きのリズムの正確さをみるひとつの方法に、生みだしたリズムの反復する状態を観察し、リズム再現に陥り易い幾つかの問題点を見出すことができる。例えば第五表イウの反復状態は女子では殆んどその出現例をみないのである。多少の創作経験によって動きの左右相称の効果の方法が常に考慮されていて異時的シンメトリックに動き、このあり方が有効な場の使用方法にも結びついて、空間要因の重要性を十分理解しているとみられる表現の諸例があげられるようになってくる。しかしこの標本も伴奏音を与えずに自由に動きのリズムを創る八表へでは両肢並行振動による重心移動と自転の結合の美的リズムを反復させている。㊸の曲の分析が最も困難であろうと考えられる例では七表トのようにツーステップにホッピングを加えた跳躍のリズム反復の呼数が合わなくなって倍数の関係が乱れてしまい、回転リズムに困難を生じる結果、この運動を最初から再現する活動は不可能となってしまうのが普通である。表現した本人が再現できない動きのリズムは、勿論他の練習者にも模倣が容易にできない性質の運動であって、よいリズム・よい連続の条件に当てはめられるように部分的修正が必要になってくる。この標本の動きの生みだしとフレーズの創り方の特徴は、移動方法は同一傾向とみられる方法を取りながら、必らず多少のリズム的变化を混入させて発展的に連続させている。さらに技術的にも困難なリズムに属する跳躍を主体とする組み合わせは、時には不確実なリズムに表現される場合も生じている。このような問題点はありながら次第にリズムは精選されて最後の自由表現では有終のリズム美を発揮している。次に同標本の主な運動要因を挙げてみる。

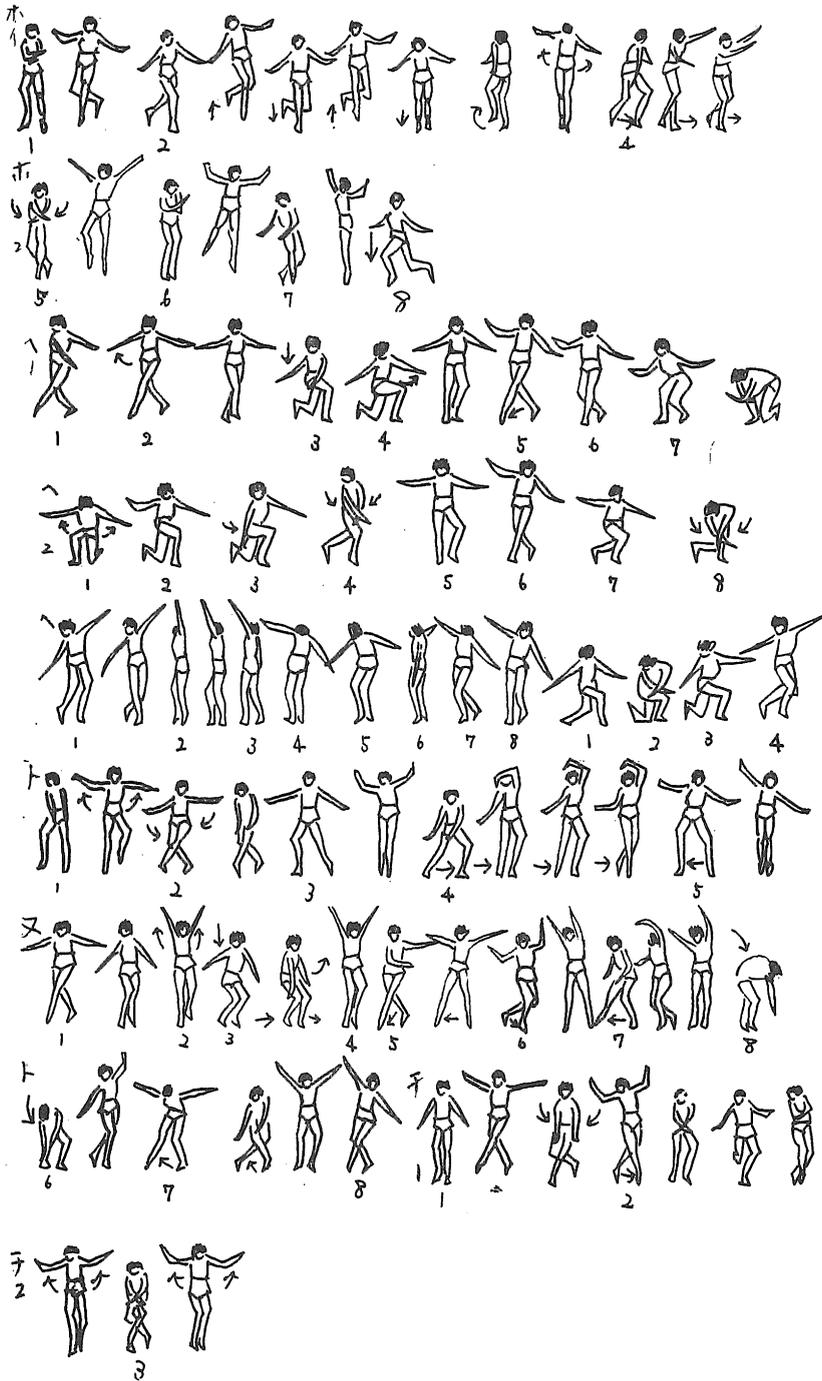
イ 片足で踏み切り他の足で着地する小リープターン・上肢の体前交叉と上体前屈。ロ ニ拍子バランスでポーズ上体前屈と斜上方上肢伸展。ニ 小リープターンのジグザグ跳。ハ ジグザグ小走り走（正確には爪先立走が自由なリズムを結合して現われ、感じの表出に幅広く利用されている。）とその反復・継歩（ツーステップ）・距離の短いジグザグ走・ジグザグ走・継走・走の終止の動きが多少あいまいになり過程のリズムにみられた不安定な連続が最後まで影響を受けたと考察できる。ホ 方向変換連続ホッピングの片脚前拳後拳交互跳・継歩・ホッピング後拳跳・継走・ホッピング後拳跳躍の跳と走の結合が自由に結び付き何の制約も受けずに自己表現を楽しむ過程がみられている。ヘ 一表ホの左腕を直線的に頭上へ伸ばしたポーズ

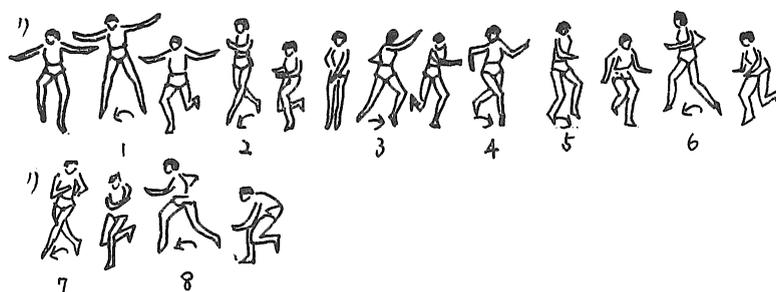
が美しい彫刻像となっているがこの標本の得意のポーズとみられ、これを中核にしたリズムの変化がよく表出されるようになる。ジグザグ走・片立膝両肢交叉と片腕連続的流動は方向変換を伴ってよい連続となり、自転・移動を伴う回転の歩と続く。ト 歩とその変化・上体側屈と前方捻転に両肢を緩やかに伴わせ膝交叉（単なる片足斜め前出による交叉ではなく膝の屈度が大きくなる）屈伸歩・継歩・屈膝・膝交叉屈伸片腕体前流動・体前屈と体上方伸展を伴う歩などとなる。ヌ 小リープターン・歩と軽いホッピング・体前屈と膝交叉屈伸歩・後拳ホップ・体前屈と膝交叉屈伸歩・後拳ホップ。チ 1 2 ジグザグ前進歩・片立膝となり片腕 $\frac{3}{4}$ 大回旋・完全屈膝と両肢交叉上挙。ル ジグザグ走と片腕体前回旋・片立膝・移動を伴う回転歩。オ ジグザグ走・中股歩・前後バランス（方向変換のときは腕を交互に後方より前へ流す。体前屈を伴ないながら後進ジグザグ走をする。㊸上肢を体前より後方に流しジグザグ前進走に結合する。さらに体後方より前方への上肢流動となる。ワ ジグザグ前後進走に前述の上肢のリズムが安定をみせて結合する。特に後進の移動方法は前進時の空間を意識して後進されたと観察される程、正確な後進移動を実施している。カ ホッピングは軽い跳び込みのアクセントがつくりズムとなって継歩に結合する。跳び込み片立膝付・後拳ホップ2回連続に上肢片腕直線の振りあげを伴う。ヨ 大役ステップホップ連続で方向変換時のステップは自由に変っている。リ ホッピングの連続で後拳の脚は正確な角度をもって挙げる・継歩。この標本は全般的にみて決してリズムカルな身体をもっているとは言えない。しかし身長も高く下肢の長さが目立つ身体は跳躍運動に強さを示めして跳のリズム変化の活用が大きな特色となっている。舞踊の基本練習のなかで男子が容易とする運動要因に跳躍の変化応用が第一にあげられ、苦手は柔軟性・リズムの変化する屈伸・脱力等があげられるとみてよかろう。この跳躍は種々速度に関係してリズムの変化が現われたり、他の運動要因との複雑な結合によって困難な技能に属する要因ではあるが、誰でもが活用する日常生活行動に現われる跳躍の種類は単純なリズムに類するとみてよい。この事例のように移動方法を固定化して跳のリズムの応用変化を無理なく運び、次第に跳のリズムをダイナミックに運び最終的には七図のように完全に新しいリズムに変化させる過程は、合理的なひとつの練習方法として参考になると考えている。また上肢の流動も七図のように次第に発展的方向をみせて、よい連続となっているのも大事にしたい練習方法である。

◎ 男子にみられる動きのリズムの特徴 イ1 タクトを正しく追った前進・側進・斜行進・後進。後進の下肢のリズムは歩巾を広くしてスライド気味となり前とは違ったリズムの移動方法を取り、上肢側開のリズムが二回不十分ながら出現する。方向変換も一応正確に行ない終止では正面に向きを変えている。八図はイ1上手に動きの感じをとらえ、まだ自信のもてない身体のリズムに対し、下肢の動きとして移動に注意を集中しているのがみられる。イ2スライド風の下肢のリズムは続行され、リズムは前回より確かになるが、上肢の動きのリズムは下肢に従属できない。スライドのリズムに上肢交互側開のリズムが結合するのは発展的リズムの方向

七 圖

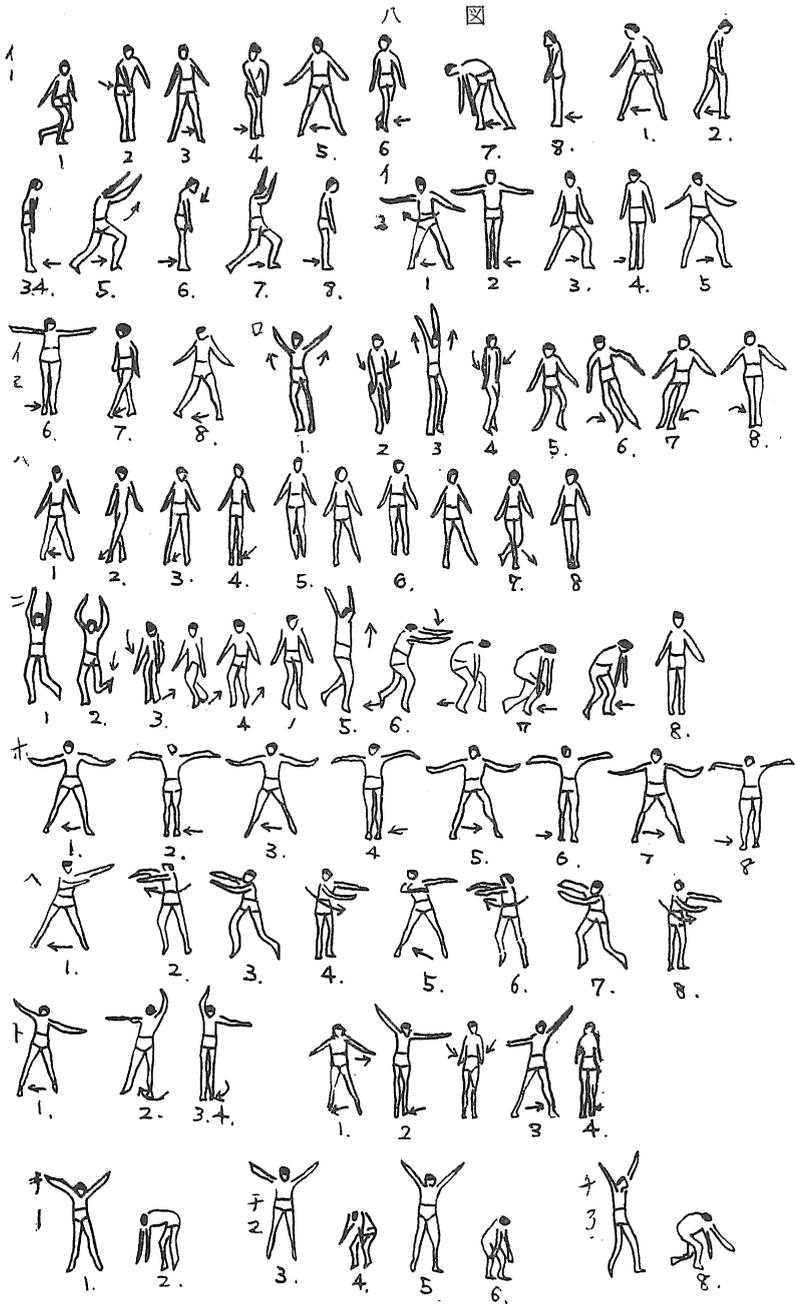




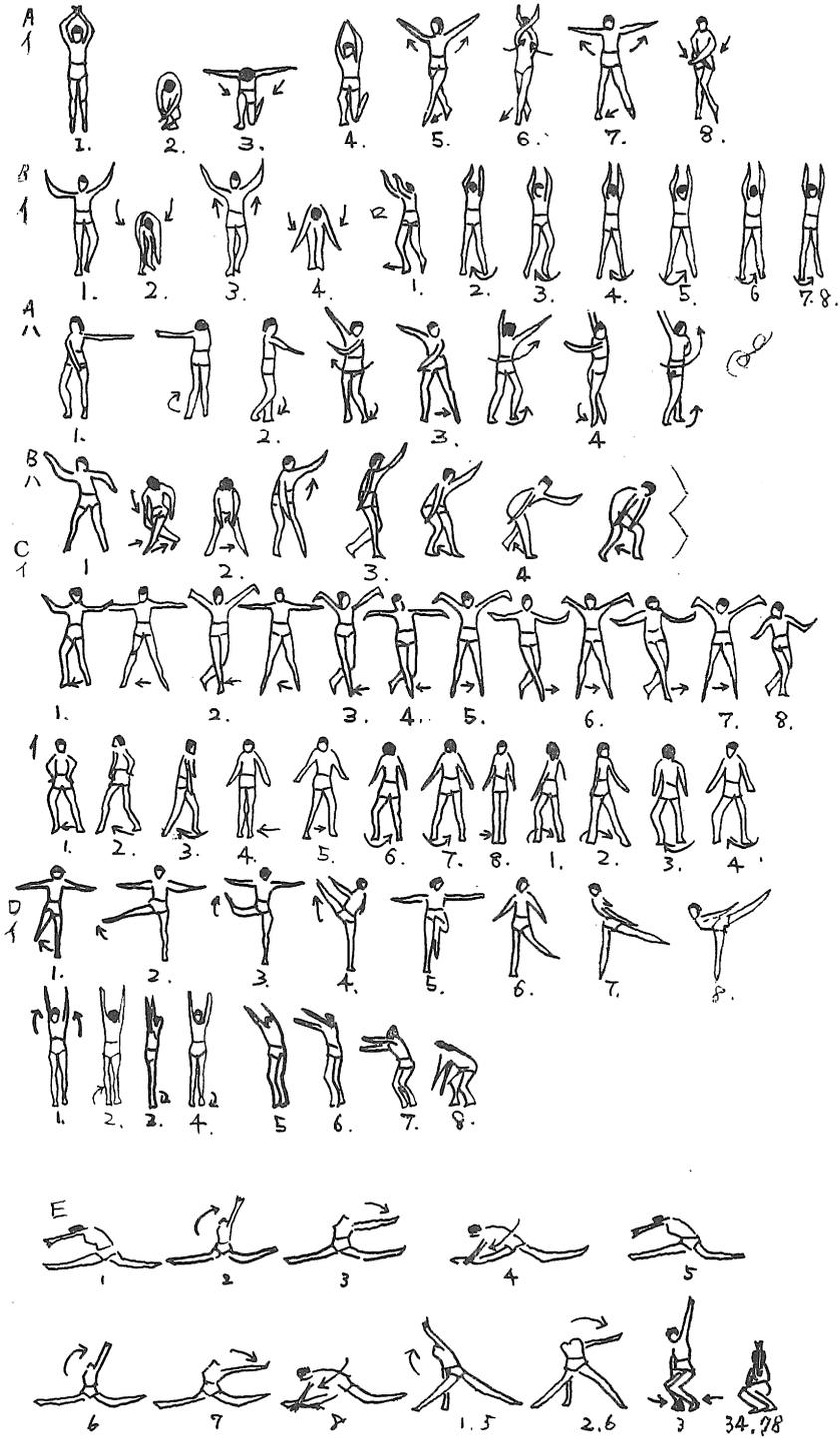


とみてよい。ハ 下肢のリズムに上肢側開のリズムが結合するが、今回は移動方法が難かしいので、最初の二タクトは下肢だけの移動で次の二タクトで全身の動きのリズムを反復しているのが観察されている。上肢の側開リズムも十分になり、標本が考え創りだした移動方法を中心にして、思考による手順方法を忠実に活動に移し、多少は与えられたタクトから動きのリズムがはみだしても自由に表現するいきかたが観察できている。ロ 動きのリズムは完全に変化して、側方への両足同時跳び込みの動きとなる。この跳び込みが細かいリズムで反復されダブる感じで方向も二度変っている。この変化するリズムは以前に練習した二拍子パランスの変型・体力テスト方法の応用ともみられる。このテンポの速い軽快なリズムには、また上肢の動きが現われなくなっているが、上体の完全リラックスの状態が下肢のリズムの変化パターンを援けている。また16呼間の経続中7・8呼間のリズムに動きの停滞がみられるのは移動の方向変化が前進より後進への移行の準備とみられる。前進より後進へ切り換える瞬間的移行技術の困難な点は、基本練習においても毎回指摘して重点的な練習を実施しているが、リズムカルさを体得する目標のためにはこのような技術収得の積み重ねが最も重要で、この訓練によって「自由に表現する」技能が身につくと考えている。また前に実施したリズムの変化を意図しているが実際は満足するリズムパターンにならず落ち付かない状態で終止している。① 右斜前方へ二歩交叉前出でダブるリズムは前と同様であるが、このリズム終了時は右足へ重心を移した形で左方への動きを始めるので複雑なリズムになっている。② ギャロップで左方へ二回連続。③ 両足跳び込み二回連続 ④ 一歩前出して跳ぶ。このような簡明直接的な動きのフレーズ構成は女子には殆んどみられないリズム連続である。ニ 斜前方へ一歩踏み出してから歩で後進・反対方向に反復・ジグザグで歩と交叉歩・体前屈をジグザグ方向に結びつける・細かい二歩で終止、終止は安定していないが新しい運動要因と方向を関係させて良い連続をみせている。この場合の前半の動きも女子には珍らしい表現法となっている。ホ 反復練習の結果は側出連続のリズムも明確になり、図のように上肢も良い波動因子をみせている。繰り返えし動きのリズムを観察して理解できたが下肢の側歩が直線的で速いリズムとなり側方に十分な歩巾をとってステップを反復したので、側挙された上肢が自然に波動のリズムをとって揺れ動くとみられておもしろい。ヘ 上肢の波動は並行の上肢のリズムで表現され、下

肢も上肢のリズムの影響を受けて波動的な曲線が始めて表出され、全身的な複合リズムとなっている。チ 1 2 3 斜行進連続に上肢の上方振りあげが結合して前回に引き続いて両肢上挙の直線と完全前屈が対照的に結合されている。さらに最後の自由課題では最も全身的な男子特有の剛直な線が出現して効果のあるリズムとなり、三回連続後の方向変換もおもしろい。女



九 図



第十表

		e	g	h	i	j	k	m	n	o	p	q	r
A	1	反復	反復	反復	反復	反復	反復	変・反	混・反	混・反	混・反	混・反	変・反
	2	反復	変・反	変・反	混・反	変・反	変・反	変・反	変・反	混・反	変・反	反復	変・反
	3	反復	反復	反復	混・反	混・反	反復	変・反	変・反	混・反	混・反	混・反	変・反
	4	混・反	変・反	変・反	変・反	反復	反復	変・反	変・反	反復	変・反	反復	変・反
	5	混・反	反復	変・反	混・反	変・反	混・反	変・反	変・反	変・反	混・反	混・反	混・反
	6	反復	反復	変・反	混・反	変・反	混・反	変・反	混・反	反復	反復	混・反	混・反
C	1	変・反	変・反	変・反	変・反	混・反	変・反	混・反	混・反	混・反	完・反	完・反	変・反
	2	混・反	変・反	混・反	完・反	変・反	混・反	変・反	変・反	反復	混・反	反復	混・反
	3	反復	変・反	完・反	完・反	変・反	変・反	完・反	反復	反復	混・反	反復	混・反
	4	混・反	変・反	変・反	変・反	混・反	混・反	変・反	混・反	混・反	変・反	反復	変・反
	5	混・反	変・反	完・反	混・反	変・反	混・反	変・反	反復	反復	混・反	混・反	変・反
	6	反復	変・反	完・反	変・反	変・反	混・反	変・反	混・反	混・反	変・反	混・反	変・反
B	1	反復	反復	反復	変・反	混・反	混・反	反復	混・反	混・反	混・反	反復	反復
	2	反復	反復	完・反	反復	変・反	変・反	反復	混・反	混・反	混・反	反復	混・反
	3	反復	完・反	変・反	完・反	変・反	変・反	反復	混・反	混・反	混・反	反復	反復
	4	反復	反復	混・反	混・反	混・反	混・反	反復	混・反	混・反	反復	混・反	混・反
	5	反復	混・反	混・反	反復	混・反	混・反	反復	変・反	変・反	変・反	反復	混・反
	6	反復	変・反	混・反	完・反	変・反	変・反	変・反	変・反	反復	混・反	反復	混・反

完・反は完全反復でリズムパターンは短いがいリズムである。
 混・反は混合型反復で反復のなかに変つたリズムが混る。
 変・反はリズムにもつとも変化があつて舞踊的要素が多い。
 変 化はまとまりがなくリズムの連続に多少不備がある。
 反 復は単なる反復でリズムのおもしろみに缺ける。

第十一表

フレーズ構成の移動方法にみられる特徴

	B	B	B	B	B	B	C	A	C	C	A	A
e												
g												
h												
i												
j												
k												
l												
m												
n												
o												
p												
q												
r												

子の場合には既に習慣的となったフレーズ構成の技法で、二回又は四回と左右相称の方法で反復するのが常道であるのが、その平均的なあり方を破ったリズム構成法に漸新味が溢れ、表現を豊かにする基本練習のひとつのあり方と考察できる。

リズムパターンを反復する場合にみられる問題点は、矢張り男子のフレーズ構成のなかに幾つかみられている。この標本は男子では最も多く自転・移動を伴う回転等を表現しているが常に左足より同一方向の回転がみられている。この場合も連続の接点における重心の移動が完全に行なわれず、リズムの乱れがみられ動き全般に伸びやかさが表現できなくなっている。しかしトでは継歩と半回転の連絡とその反復がとりあげられて良い発展をみせている。次に下肢のリズムを追跡してみる。右足左足前出で右足より右廻りの自転・左足に軽く重心移動があって右足より継歩・左足で右廻りの回転に左足・右足と前出し左足を軸に左廻りのリズムで反復が流れるように行なわれている。反復性に関連する問題点のひとつに二種類の運動要因の結合がある。例えば小走りの技能は男子においても必ずフレーズ構成中に1回～4回と現われているが、このリズムにさらに前屈が結合された場合は、4回目8呼目に出現する反復が順当でない現象がみられている。この事例からも男子における巧緻性を豊かにする目標に近づくねらいからは、直接的な細かいリズムと之とは対照的な運動要因との結合を考えて反復練習を課す必要もでてくる。第九図のAイは剛直型であるが巧緻・柔軟を考えてリズムパターンを考え、ロは回転でリズムの変化を表わしている。Bは長身型であるがA以上の柔軟性がある。イは体前屈に継歩を結合しロは小走りの後進を斜行してリズムのよい連続を考えている。Cイは自由に考えた移動が特徴となり、大まかな側歩のステップが男子の柔軟性を全身に表現している。Dイはリズムカルな動きが豊かであるが安易に基本練習で反復した運動要因を結合した例のひとつである。E この標本の例は多くあげられなかったが、全身がリズム化されている例で、特に最終のリズム構成が優れている。

III 考 察

各個人がフレーズ構成のねらいをもって直感的に生み創りだした運動因子を、どのように連結するかその傾向を探ってみる。これは最初のリズムパターンそのものの結合にもよるが、その連続方法には、単なる持続か反復か、また類似的变化・漸進的变化・持続的变化・急激的变化などが考えられる。これを簡単に反復型と変化型に分類してみる。(第十表) 厳密に考察する場合は勿論第十一表の移動の方法も関連するが、今回は運動要因結合リズムのあり方を主体に追求してみる。

① 経験が豊かになるに従って53%, 63%, 81%と変化型が増し、単なる反復型は47%, 38%, 19%と減少している。また第十表にみられる混合反復型は、どちらかと言えば変化型に属するので、これを加えた場合は予想以上に自己表現力が豊かになれば、変ったリズムを結合してフレーズ構成をする傾向が強いと考察できる。

② 楽しい伴奏曲を与える場合は35%が変化型のリズムを選択し、伴奏曲のない場合は19%に減少する。ワルツ（ダニユーブ河の漣）に関して特に変化型のリズムは少ないが、移動の方法は変化型に属している。これはピアノ奏の速度に関係していると考えているが、また移動を主に考えた場合は動きのリズムが副次的になる傾向も認められている。

③ 伴奏曲を与える場合は特にリズムの変わったマズルカに変化型のよいリズムが現われ、知っている曲で動き容い速度、アクセントをもつ「さくらさくら」にもフレーズ構成の新鮮なリズムが多く現われている。伴奏音の無い場合は特別に目標を与える——16呼間への延長を考えて4呼の動きを創る・自由題で好きなリズムを結合してフレーズ構成をする——場合はその効果が高められている。

④ [1]の質問項目に関して、動きの生みだし・フレーズ構成中において各標本が関心をもつのは「動きのリズム」か「表現」かについて考察してみる。結果は動きのリズムに関する問題17項目に対して表現に関する問題は14項目になっている。前者はリズムに関する頻数10を最高に、生みだし・まとまり・モチーフ・とらえ方・動き方・強さ・予測・リズムの関連性・簡潔性・動き創りの瞬間性・動きの安易なリズムなどがあげられ、後者には反復法に関する頻数9を最高に、連続・まとまり・始まりの感じのだし方・表現のとらえ方・平凡性の打破・題材の選択・とり組みに陥り易い安易性・題材の理解・自由性・抽象性・発展性の容易・観察のできる題材・全般的構成法などがあげられている。リズムに関する問題を直視しているのは男子標本に多く、表現として問題をとりあげるのは女子標本に多くみられるが、何れにしてもテスト終了頃には表現を理解して自由表現にとり組んでいる実態がみられている。

誰にでも何んとなく創れる動き創りの安易性から脱却するために、多くの角度からリズム・フレーズ構成法を検討して、効果的なダンス指導法を考えていきたい。動きの生みだし・フレーズ構成の過程から考察できる練習法に関しては既に述べているのでここでは省略する。

おわりに

小学校新要領では昭和24年以来、馴れ親しんできた「リズム運動」を「ダンス」と改称している。その教育内容は、自己表現を中核にして生活感情を美しい運動表現にうつす特性をますます明確にしている。小学校低学年より題材は精選され、ダンスの中核としてリズムを重視し、発達段階に促して表現技術が理解され充実できるように、とかく問題視された学習内容の具体性欠如云々を相当盛り込んでいるようにもみられている。その一例としてフレーズに関する事柄がとりあげられているが、小学校高学年時より重要視する必要を認めている。例えば題材例「二つの力」のフレーズ構成を集団対集団で実施してみる。① ふたつのグループがぶつかってみる。これは男女共に容易に動ける。② 押し合って対立。これは模倣になり易く、入り乱れて渦巻くは男子には容易に理解できない。入り方が種々のリズムを生み、乱れる動きは或る程度練習が必要になり、渦巻く曲線の移動が更に技術を要する。然しこのフレーズ構成的内容のとらえ方はダンス創作の方向を明かにするものであり、それぞれ対象に直接撃がる練習法の考察が急務であると考えている。

今回はフレーズ考察のため懸案だった舞踊譜を作整し、動きの追跡を容易にしてその理解を計ってみた。然し各種運動因子は概略とらえられるが、もっとも重要なリズムパターンは掴み難く、その上移動の方法が直接結びつけられなかったので、表現への転移が明確にできなかったと反省している。

標本になった学生諸君の心よい協力を深く感謝しています。特に第六・九図Eの二人は既に子どもたちの喚声を浴びながら教育現場で懸命の活躍のようです。おわり